

信仰のレースを走り続ける ヘブル 12:1-2

1. こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、いっさいの重荷とまつわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競走を忍耐をもって走り続けようではありませんか。(12:1)
 - a. 「こういうわけで」というフレーズから、二つの考えがつながることが推測できる。この前の章までは聖書に出てくる忠実な信仰者たちの人生と証を通して信仰とは何か、という例をあげてきた。
 - b. これらの人々は「雲のように私たちを取り巻く証人」と表現されている。神のすばらしさを証する意味での証人、あるいは私たちの人生を見ながら応援してくれる証人、ということかもしれない。
 - c. いずれにしてもポイントはあきらめない、ということである。妨げになるものや罪を捨てて、私たちの前に置かれているレースを忍耐をもって走り続けるように勧めている。
 - d. 神から与えられたレースを正しく走るには正しく準備をしなければならない。ここでいう重荷とは必ずしも罪ではない。この重荷とは人生の中で妨げになるもの、気をそらす原因となるもの、あるいは良いものだったのに優先順位が変わり障害となってしまったものかもしれない。例えばスポーツやレクリエーション活動のような「良い」ものも重荷になり得る。これらは本来豊かな人生のためになる良いものであるが、家族や自分の責務、そして何よりも神よりも優先させてしまう時に逆に重荷となってしまう。
 - e. 罪は重荷とは違い何も良いところがない。重荷と罪を混同してはならない。重荷は私たちの人生の中で再分配したり組み立て直すことができるが、罪は容認してはならない。重荷は罪につながることもあるが、罪は死をもたらす。ここで示唆されている罪とは不信仰のことで、それはいずれあきらめにつながる。
2. 信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをもものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。(12:2)
 - a. 私自身や他の人の人生を見て気付いたことは、私たちはレースを走り続け前に進んでいくことよりも、重荷や罪を脇に置くことにフォーカスしてしまっている、ということである。障害や罪を避けることは一つだけけれども前に進んでいくことはまた別のことである。神は私たちがこの二つを同時に行うことを望んでおられる。
 - b. これは短距離競争ではなく忍耐を必要とするマラソンである。あわただしく突発的ではなく、一定のスローペースのレースだということを意識したい。
 - c. 決して楽なレースではないが、ある目的のために備えられたレースである。良い父が子供を将来優秀にするため訓練をするように、天の父は私たちを子供として扱ってくださり、私たちがこの地上での生涯を終えた後で本当の財産を受けられるようにしてくださっているのである。私たちの苦しみの一時的な痛みはイエスが耐えてくださった痛みと同じで、イエスと同様私たちは完全にされ、不足するものは何もなく、御霊の実をも付けるようになる。
 - d. したがって、このレースを走る時の私たちの態度は喜びをもって、信仰の創始者であり完成者であるイエス・キリストに向かって行くものでなくてはならない。神が私たちをこの世の無意味な出世競争から呼び出してくださり、自ら備えてくださったこのレースに参加させてくださることは私たちの特権である。
 - e. これは神ご自身が備えてくださったレースなので、このレースを正しく走り続けるためには神の声と導きに従う必要がある。イエスに近づく信仰を持ち続ければこのレースのゴールはイエスが導いてくださる場所である。